

後二條天皇 北白河陵神楽岡部事務所改築工事に伴う立会調査

本陵は、京都市左京区吉田山の北西にあり、すぐ南には今出川通りが東西にのびている。西に向かって下る緩やかな斜面上に位置しており、現在は周辺を市街地に囲まれている（第34図）。本陵付近には京都大学構内弥生遺跡や京都大学北部構内遺跡が展開しており、隣接地では縄文土器の出土も確認されている。平成21年度に本陵墓地内にある神楽岡部事務所が改築されることとなり、改築箇所と付帯工事箇所について立会調査を行った。調査は、平成22年1月19日から1月22日の間に本部職員が立会い、それ以外の工事期間中は月輪陵墓監区事務所職員が随時立ち会った。

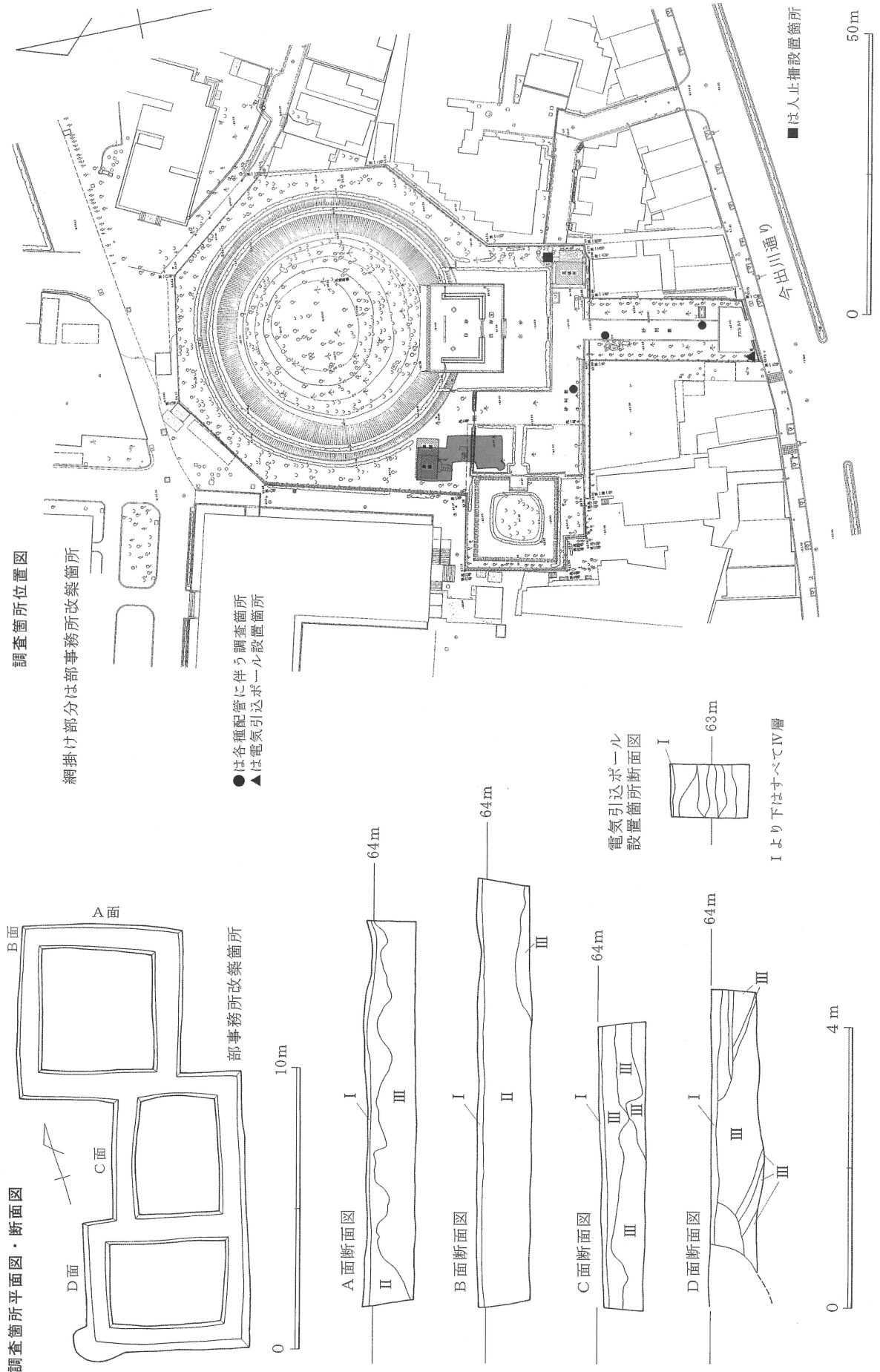
調査の結果は以下のとおりである（第34図）。

部事務所改築箇所 規模は長さ15m×幅最大8m×深さ約0.8mである。深さは基礎部分を中心に掘り下げた数値であり、幅約0.7mの溝状に掘り下げている。断面図に従って土層を示すと、東西方向のA面と南北に接するB面では、表土(I)の下に黒色粘質土(II)、その下に黄褐色主体の粘質土(III)が認められる。III層上面はA面でわかるとおり、南北方向に畝状を呈していたと考えられ、その上をII層が覆う。また、A面は西端で急激に地形の下る状況が認められる。調査箇所と西隣接地では、隣接地が約1m低く、石積みにより高低差の調整が図られている。よって、II層は現在の陵墓地の範囲を整える際の盛土と考えられる。III層についても礫などが含まれており、陵墓地の整備に伴うより古い時期の盛土と考えられる。C面・D面についても特徴は類似しており、III層と考えられる。D面については北に向かって下る地形に対して盛土を行った比較的細かい層位が確認できる。地形は全体として西に下っているものの、局地的には入り組んでいる状況が観察される。

電気引込管・水道管理設箇所 新規事務所から各種の配管がなされているが、その予定地の4箇所でも適宜試掘を行い、その後に立会いを行いつつ全体の掘削を行った。部事務所改築箇所とは大きく異なり、各箇所とも比較的細かい単位で水平の堆積が認められる。堅緻な土層が多く、中には粉碎した土器片の見られる層がある。細かい特徴の違いはあるが、土層の性格としては同じであり(IV)、細かい単位で丁寧に積まれた様子からも参道から拝所にかけてを整備する際の盛土である可能性が高い。参道南端の西側に位置する電気引込みポール設置箇所では、もっとも深く地表下約1mまで掘り下げたが、土層の堆積状況に大きな変化は認められなかった（第34図）。また、試掘箇所以外の場所を掘削中に石列を確認したが、これは、現在の拝所を区画する石列の延長線上に位置することから、以前の拝所を区画する石組溝の一部と考えられる。

人止柵設置箇所 基礎埋設箇所の掘削に立ち会ったが、各種配管の埋設箇所と同様で、拝所整備時の盛土層と考えられる。

以上、各掘削箇所とも遺構は確認されず、遺物の出土はなかった。上記の結果を踏まえ、工事は予定通り施工した。(清喜裕二)



第34図 北白河陵 調査箇所位置図 (1/1000) および平面図 (1/200) ・断面図 (1/80)